

「見えない星を見る」

今から 15 年ほど前のコラムを目にする機会がありました。有名な天体の一つであるアンドロメダ銀河 (M31 星雲) を肉眼で見える方法について書かれたものです。(双眼鏡や望遠鏡を使えばもちろん容易に見ることができるのですが、・・・)

アンドロメダ銀河は、名前の通りアンドロメダ座にあり、そのアンドロメダ座はペガサス (ペガサス) 座の隣にあるため、ペガサス座の大四角形を頼りに見つけると探しやすいと言われています。

まずは、「そこに銀河があると思われる場所」を見てみると、残念ながら多くの人はあるのかないのかわかりません。しかし、次に、アンドロメダ銀河を直接見るのではなく、少し視線をずらしてみると、不思議なことに、「あると思われる場所」に星雲が見えてくるというのです。

これは、視野の中心 (中心視野) ではなく、中心から外れた視野 (周辺視野) で少ない光信号を受け取っているからであるという、目のつくりのおかげなのだそうです。アンドロメダ銀河の光は微かなものですが、少し視線をずらして周辺視野で捉えることで「見える」ようになるのです。スポーツや速読術、車の運転など、周辺視野を鍛えることは日常生活でも有用であると言われて

「学びの把握」

教室には、学習に積極的に参加している子どもがいる一方で、参加できない子どももいる。授業中あまり発言しない子どもや、あえて自分を表に出さないようにしている子どもなど、いろいろな子どもがいる。活発に発言する子どもには目が向きやすく、その情報は入ってきやすい。注意を向けにくい子どもがいることを念頭に置き、そうした子どもに意識を向けることを大切にしたい。

学習活動においては、子ども同士の関係を捉えることが大切になる。とりわけ、発言に対する他の子どもたちの受け止め方を注視したい。発言する子ども以上に聴き手の子どもに目を凝らすのである。耳を傾け傾聴しようとしているか。視線や姿勢はどうか。

共感のシグナルを出せるかどうかにも意識を向けたい。うなずきながら、「そうそう」「なるほど」「確かに」などのつぶやきが出ていれば、他者を受け入れ、共に学ぼうとする集団であると考えることができる。きっとそこには、居心地のよい豊かな学びが成立しているはずだ。

(日本教育新聞より)

教師に必要な 3 つの能力

子どもとのコミュニケーションで大切なものと言われています。

1 「リレーション」

学校には様々な子どもがいます。苦手だなと感じる子どももいることでしょう。でも、子どもにとってはただ一人の大切な先生なのです。一人一人個性の違う子どもとも関係性が作れるようにすることが求められます。

2 「ペーシング」

なんだか合わないなあと思う相手に心を開いてはくれません。教師は子どもの悩みや相談を聞くことが大切な仕事の一つです。カウンセリングの研修を通してしっかり身に付けたいものです。

3 「相談されやすいオーラ」

子どもが相談しやすい雰囲気を出していますか。皆さんの周りにいる相談しやすい人を思い浮かべてください。どこか温かな雰囲気や信頼のおける人ではないですか。自分の中でモデルをみつけて参考にしましょう。

私たち教師は、子どもが困ったときに安心して助けを求めてくる「心の安全基地」になりたいですね。

あふれる情報から真実を見いだすために、周辺視野を意識することの重要性は、授業づくりをする上でも、忘れてはいけないことだと考えます。

みなさんは、授業中、発言している子どもだけでなく、その周りの子どもの様子を視ていますか？そうすることによって意図的な指名で子ども同士をつなぐことができるようになります。発表している子どもへ3、学級全体に7の割合の視線を、とも言われています。

「うんうんとうなずいていたけど、どうしてかな？」
「〇〇さんと〇〇さんはちょっと話をしていたけど、何を話していたの？」

子どもの発言を基に、意図的に指名をすることで、教師ではなく子どもが子どもの考えを価値づけたり、他の考えを引き出したりすることができます。単なる「どうですか？」といった投げかけだけでは生まれないう「子どもと子どもをつなぎ対話のきっかけをつくる」こととなります。

「人間は見たいと欲する現実しか見ていない」

【問1】右の図は何に見えますか？



多くの人が「人の顔」と答えるのではないのでしょうか。円が4つあるだけなのに、確かに顔に見えてきます。私たちの脳は、4つの円の配置から、目と口と輪郭を読み取り、この図を「顔」というグループに選別したのです。これをパターン認識といいます。

「人間は見たいと欲する現実しか見ていない」

ローマ時代のジュリアス・シーザーの言葉です。この言葉は、まさにパターン認識能力のさらに奥に潜む人間の心理の本質についている気がしてなりません。火星の人面岩は、地球外生命体からのメッセージではないかということで一時期話題になりました。真偽のほどは分かりませんが、「顔の構造」に見えるパターン認識と、「異星人が作ったモノであってほしい」という深層心理が働いている可能性は十分にあるでしょう。

前述の周辺視野で見ることで、**直視してははつきり見えなかったモノが見えてくる**こともあります。さらに、そうすることによって、固定化されたパターン認識を脱して新しい発見につながるかもしれません。（前述の「見えない星を見る」のコラムより）

発表を聴いている子どもの姿を見ることによって見えなかったモノが見えてきます。私たち教師の大切な仕事である**“みる”**ことについて、「みち114号」を再読してみましょう。



「主体的・対話的」な学びを生む課題を

【問2】

右の図の全ての形の穴を通り抜けることができるのは、どんな立体でしょうか？



ある日の教育研修センターでの午後のひと時に、ある先生から提示された問題です。

「三角柱のような形だと・・・」

「円錐のような形なら・・・」

いろいろな立体を想起しながら考えますが、二つの穴は通り抜けることができても、あともう一つの穴は通り抜けられない・・・。

知らず知らずのうちに、他の先生に自分の考えを聞いてもらう・・・。その意見をもとに自分の考えを修正する・・・。授業中の子どもたちを彷彿とさせる場面であり、体験でした。

「降参？・・・答えを言う？・・・」

「いやいや！・・・まだまだ！」

そして次の日。

「わかりました！○○な形ですね？」

満面の笑みで考えてきた立体を説明する先生の姿。正解だとわかると子どものように大喜び。まさに、授業で真剣に考えぬいた後に正解にたどりついた子どもが見せる姿と同じでした。

授業アドバイザーの先生方がよくお話しする「ジャンプのある課題」や「W型の課題」。子どもたちを自然と「主体的・対話的な学び」に誘う授業を大切にしてみましょ。そのためにも、学び続ける教師でありたいと思っています。

探求的で協同的な授業を！

本市の特色は、「授業と授業研究を第一優先にした学校づくりの推進」、つまりは**「探求的で協同的な授業」**が市内すべての小中学校で取り入れられているということです。子ども同士が学び合える学習形態の授業を全学級で日常的に取り入れ、互見授業等を通して教員同士が授業改善や悩みについて気軽に話し合うことができる雰囲気こそが、子どもたちの健やかや成長や豊かな学びにつながっているのです。

コロナ禍で、感染防止対策に重点を置き、テスト隊形の学習形態での一斉授業から脱却できない面もあったかと思いますが、その中でも、「ペア」及び「4人組（または3人組）のグループ」の学習形態を学校全体で取り入れ、少しでも授業の質の改善・維持に努めようとした取組も見られました。ぜひ、各学校において、コロナ禍でのグループ学習はどうあればよいかを話し合い、子どもたちの学びの向上を目指していきましょう。

【「学校ならではの学び」＝「協同的な学び合い」を保证するために】

○マスクをしっかりと着用し、

○換気をしながら**グループやペア**の形態を

できるだけ入れましょう。

○「話す」よりも「互いに見る」を意識して。

○「会話禁止」だとしてもグループにする意義はある。

